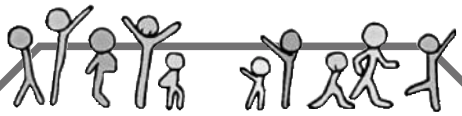
この妹がなんと牧師という設定です。こう書いても、みなさんにはあまりピンとこないかもしれませんが、キリスト教でもプロテスタントでは教派によっては女性も牧師になれますし、牧師は結婚も許されています。しかしカトリックではいまだに神父は男性のみであり、妻帯も許されていません。映画中で、祭服を着たフンメル牧師が車を運転中、運転に文句をつけた車にむかって中指を立てるシーンがありますが、相手の驚愕ぶりが印象的でした。父子家庭のエーミール、父母が離婚の危機にさらされているポニー、女手一つで息子グスタフを育てるフンメル牧師と、現代ドイツの家庭事情が反映されています。また映画の舞台となっている再統一後のベルリンも、多文化共生を目指す首都として描かれていて、エーミールを助けてくれる子どもたちが様々な民族の出自となっているのも映画の魅力の一つです。ぜひ一度観てください！



ギリシアの映画監督テオ・アンゲロプロス（1935-2012）：ヨーロッパの周辺を知るために

経営学部　島田　　了

学生の皆さんは2010年の欧州債務危機というのをご存知でしょうか。ユーロ危機ともいわれ、ギリシア政府の粉飾決算が暴露されたことからユーロ関連の経済危機が連鎖しておこった事件です。これにより、ギリシア経済の脆弱さとユーロ加盟諸国間の格差が浮き彫りになりました。

美しいエーゲ海と白亜に輝く古代神殿のポスターとともに紹介されることの多いギリシアですが、その歴史は困難の多いものでした。2世紀以降はローマの支配下に、15世紀以降はオスマン帝国の支配下にありました。19世紀になりオスマン帝国の弱体化と西欧列強の介入により、1900年ぶりにギリシア人の国家が復活することになりました。1832年にバイエルンの王子を国王に迎えギリシア王国が成立します。しかし政治は安定せずに後継者として新たにデンマークの王子を新国王として迎えることになります。その後もクーデターによる共和制の成立、王政の復活など不安定な状態が続きます。第二次世界大戦には連合国側として参戦するも、1941年にはドイツの侵略を受け、占領状態に置かれます。

第二次世界大戦後は連合国によって解放されますが、1946年からは王党派右派と共産主義左派との対立からギリシア内戦が勃発します。1949年に内戦は終結し、1950年には総選挙の結果、保守連立政権が発足、さらに翌年の選挙によりようやく政局は安定するかと思われました。

しかし1960年代に中道左派が躍進すると、これを警戒する軍のクーデターがおき、その後軍事独裁政権が成立して、国内で厳しい弾圧が行なわれます。1970年代に国民の不満、学生による大規模なデモなどの抗議活動が活発になります。1974年の軍事独裁政権の崩壊後初の選挙により、君主制の廃止・民主制への意向が決定され、民主主義が回復されます。それからは大きな混乱もなく安定をつづけ、1981年にヨーロッパ共同体（ヨーロッパ連合の前身）に加盟を果たしたのでした。

長々と歴史の話をしましたが、こうした複雑で困難な背景をギリシアは背負っているのです。この複雑なギリシアの現代史とじかに向かい合ったのが、テオ・アンゲロプロス監督で、彼の代表作が『旅芸人の記録』（1975年）です。1936年から1975年までのギリシア現代史をあつかった、4時間弱（232分）という長い映画です。歴史を扱ったといってもただのドキュメンタリー映画ではありません。旅芸人の一座が

各地で目撃し、遭遇する事件を通して歴史が捉えられていきます。しかも旅芸人一家の父の名前はアガメムノン、母はクリュタイムネストラ、長女はエレクトラというように、古代ギリシアの神話を下敷きにしています。歴史上の事件とギリシア神話を思わせる一家の出来事、そして一座が演じる劇中劇とが、幾重にも重なりあって物語を紡いでいきます。また一座は、旅を繰り返すことによって時間のなかをもさまよいます。この時間と空間をめぐる旅を通して我々は過酷な運命に耐えながら、生きることをあきらめないギリシアの民衆の姿を知ることができます。

演出は全体に抑制的で、例えばカメラを固定して事件を正面から撮ることにより、演劇の舞台を思わせるような演出が多用されています。音楽も控えめで、それだけにいっそう人々の足音や雨音などが印象的に響いてきます。

その他の代表作として『シテール島への船出』（1984 年）があげられます。30 数年ぶりにかつての内戦の英雄が国外追放から帰ってきます。人々は戸惑いながらも彼を歓迎しますが、そこにある種の居心地の悪さも感じているようです。ある日、村の人たちが土地を売ろうとしているのを彼は知ります。その土地はかつて彼が仲間とともに命をかけて地主たちから勝ち取ったものでした。彼は静かに抗議の姿勢を見せ始めます。豊かになった人々が忘れてしまった大切なものを再度突きつけられて困惑する人々の様子が、やはり静かに淡々と描写されていきます。物語はここでも象徴的に表現され、現実の出来事と主人公の監督が撮影中の映画の場面とが重なりながら、進んでいきます。この作品の背景にも、トロイ戦争の後も長く故郷を留守にして彷徨をつづけたオデュッセウスの帰還と夫を待ち続けた妻ペネロペ―の神話が重ねられてもいます。

タイトルの『シテール島への船出』から連想されるワトーの絵画のような美しい画面が印象に残り、特に最後の「船出」の場面は忘れることのできない場面となるでしょう。彼の居場所は故郷にはもうないのです。救いのない結末のなか、信念を持つ人の美しさと、困難の中で再び見出された夫婦の愛が、夢をかなえる伝説の島「シテール島」への船出を連想させるのでしょうか。

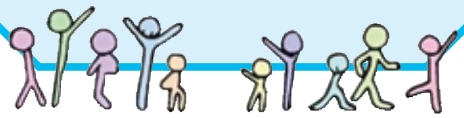
その他にヨーロッパの豊かな国への出稼ぎに頼らざるを得ないギリシアの社会を背景にした『霧の中の風景』（1988 年）や移民問題を扱った『こうのとり、たちずさんで』など、アンゲロプロス監督は数々の難問に、美しい画面で、静かにしかしきっぱりとした抗議の姿勢をもって挑んでいきます。

アンゲロプロス監督の映画を私はきちんと理解できたわけではありません。しかし彼の映画を通してヨーロッパの周辺国であるギリシアが抱える問題に触れ、その苦悩をうかがい知ることはできました。ヨーロッパの中に多様性という言葉で簡単に済ませることのできない現実があるのです。

映画そのものの説明はうまくはできませんが、アンゲロプロス監督とその作品の紹介には少しはなったのではないでしょうか。この名前を覚えておいて、機会があればぜひご覧ください。皆さんのヨーロッパの理解が深まるきっかけになることは保証いたします。

戦車、白鳥の湖を踊る
～ロシア映画『T-34』(2018年)～

経済学部　清水　伸子



1．戦車は奥が深い

「戦車博物館に行きたいんですよね。」

最近５年の間に、この告白を４人の学生から聞いている（実際に行った学生も１人いる）。